
悲しみのロンリガイ

窓野 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみのロンリガイ

【Nコード】

N0154D

【作者名】

窓野梓

【あらすじ】

水泳の金メダリストだった田中は、ある日突然、水を寄せ付けない体になった。水を拒否する体のお陰で、水面を歩けるようになった。と、主人公に手紙をよこしてきた。それを信じた主人公は東京湾に浮かぶ海蛸に行き、田中に会おうとする。

ある日、差出人が書かれていない一通の手紙が届いた。中学まで同級生だった田中君からだと言われにはすぐに分かった。手紙を読む前に田中君のことを思い出してみた。

*

「より速く泳ぐ」ことは、田中君の目標だった。

小学生のころ、泳ぎだけは誰にも負けなかった田中君は、誰からも称賛を浴び、オリンピック候補とも、神童とも騒がれた。僕は水泳の時間になると、田中君の泳ぎを憧れのまなざしで見ていた。

中学生になると、田中君と僕は水泳部に入部した。僕はただのスイマーだったけれど、田中君はオリンピックに出て、ついに金メダルまで頂いてしまった。しばらく騒がれていたけれど、田中君は誰よりも遅い奴になった。そう、僕よりも泳ぎが遅くなってしまった。

ある日、田中君はプールサイドに座って僕に向かって悲しそうに言った。

「水に入って足や手を必死になつて掻くが、体が前へ進んでくれない。まるで、水を捕らえると言う感触がないんだ」

なるほど、その場で止まっていたと言ったほうが早かった。体育の先生も不思議がった。田中君の体はまるで水に馴染めなくなっていた。長いスランプが田中君を襲った。やがて田中君は水泳部を止めていった。目標を失った田中君は家にこもった。訪ねていった僕にも会おうとはしなかった。

3ヶ月後、田中君は自殺を図った。運良く一命を取り留め、すぐに病院へ入れられた。

すぐに僕は病院を訪ねてはみたけれど、決して会ってはくれなかった。幾度か訪ねてみたが、そのうち病院へ行くこともなくなっていた。そして僕は一番の親友を失った。

*

僕の知っている田中君はここまでだった。僕は中学を卒業して高校へ行った。それから、大学を卒業し、平凡なサラリーマンをやっている。僕はずっと孤独だった。田中君のように心を開ける友を見つけることが出来なかった。一人自分の部屋にいと、いつも田中君のことを思い出していた。

「田中君がいてくれたらなあ」

幾度となくそんなことをつぶやいていた。だから、差出人が書かれていなくなつて、すぐに手紙が田中君からのものと分かった。僕は封筒を破り手紙を出した。

*

こんにちは。元気かい？ 今、僕は、ちょっと落ちこんでるんだ。久しぶりだね。

会って話せるといいのだけど、今の状況じゃ、会えないんだ。その理由を話そうと思う。とても長くなる。いつものように、きみは静かに聞いてくれるよね。

何処から話せばいいのだろう。取り敢えず、僕たちが会えなかった、中学3年生あたりから書こう。

高校一年の夏、僕は近所の区営プールへ久しぶりに泳ぎに行った。水に漬かっていた僕は、突然水中から弾き飛ばされ、水面に転がった。水につかっていたはずの僕の体は、ブヨブヨした水の感触を感じていた。指の先を水面に押し当てるが、まるでビニールの幕がかかったように水の中に指を入れることすら出来なかった。僕の体が、水を完全に拒否していた。

それからというもの、僕はプールへ歩きに行くようになった。プールサイドに座った僕の前をピンクのゴーグルを着けた女の子が、水飛沫を上げて横切つていった。僕は条件反射のように女の子の後を追っていた。

「ねえ、きみって、魚座だろう？」

追いついた女の子の横でほくく全身しながら、声を掛けていた。

すると、すぐ側の足元で

「あんた、ここは泳ぐとこよ……」

僕は声のするほうを向いた。中年の女性が、僕のすぐ側で、蔑むような視線を浴びせていた。

「その男性！水の上を歩いてるあなた。泳いでいる人の頭を踏むと危険ですから、すぐにプールの外へ出てください！」

プールサイドから褐色に日焼けした大学生らしい監視員が、僕にメガホンを向けて怒鳴っていた。僕は水の上に呆然と立ちすくんでいた。すると、監視員は間髪を入れず言った。

「ねえ、きみ、早く出たまえ。歩くならプールの外で歩きたまえ、外で」

「そうだ。プールで歩くくらいなら、外で歩けばいい」

頭の禿げた五十歳くらいの親父さんが、真つ赤な顔を、半分だけ水から出して、足元のほうから僕を迷惑そうに見上げていた。

「す、すみません。すぐ出ますから」

気の小さい僕は、条件反射のように謝っていた。水の上をゆつくり歩いてプールサイドへ上がった。みんな僕の優れた能力に嫉妬しているんだ、と僕は思った。

「ウソー。ホント。まじー。キャー！」

廻りで騒ぐ黄色い声が聞こえた。僕は平然を装いながらプールサイドに上がり、おもむろに椅子に腰掛け煙草をくわえた。そう、僕はこのころ不良の高校生だった。金メダリストと言う頂点から泳がない取り柄のない奴に転落したら、人間なんて、なかなか這い上がれないものさ。煙草はアウトローらしくていいね。

「プールで歩いてもいいじゃないか。水の上は軟らかくて、冷たくて気持ちがいいんだ。お前らにはこの気持ちから分らないだろう」

独り言をいいながら煙草に火を付けようとするが、吸いなれないせいか、手が滑って煙草を落としてしまった。やっぱり高校生は煙草を吸ってはいけない。慌てて転がった煙草を拾おうとしたら、誰かの足が煙草の側にあった。顔を上げると、いつのまにか、ハイレ

グ姿の五、六人の娘たちが、僕を取り囲んでいた。

「ねえ。一人で歩きに来ているの？」

とびきりの胸と尻が飛び出したナイスバディの女が、僕の顔をじっと見つめていた。僕は、女の白い右胸にできたほくろを見ながら、言った。

「ぼ、僕のことかい。水の上をちよつと歩きに来ているだけさ。もちろん一人きり。僕みたいな奴は特別扱いでね。つねに寂しいものさ。そう、いつだってロンリイガイさ」

「キヤー。やっぱり。歩いてたんだあ。かわいいー」

水さえあれば、どこでも女が集まり騒ぐ。そして、周りの男は嫉妬する。今のところこの能力を社会に役立てようなんて、僕はまるで考えていない。とにかく目立ってもてることに生きがいがあった。でも、この能力の生かす道が何もなかったら、それはそれで惨めだ、とも思うさ。君もそう思うだろう。

君も知っているだろうけど、ぼくの母は心配性なんだ。こんな体になってすごく心配している。僕は別に不便を感じていないけれど、母のすすめで仕方なく大学病院を受診した。僕は受付から取り敢えず内科を受診させられ、それからいろんな所を回って精神科に行き着いた。

大学病院のお偉い先生によると、速く泳ぎたい、目立ちたいという強い願望が精神を変えたという。どう精神が変わったか、すぐに分析できないらしいが。世の中分らない事だらけだ。

「命に危険はないから安心していいよ」

特殊能力の診断だったはずなのに、どうして精神科なのかわからなかった。精神科の医者は、にこにこして楽しむような顔をして僕を見ていた。

「諦めず、根気よく治療していこう。そうすれば、水の中にも入れるから」

高額な診察料を払ったのにこれだけだった。治療していこうと、医者は言っていたが、治療しなければならぬ理由が僕には分から

なかった。別に水の上を歩けても困らないのだからね。

プールもいいが、やはり海が最高だった。広がる大海原の水面をさっそうと走る姿はさすがに注目の的だった。褐色のサーフアーも真っ青だった。

僕はこの超能力のお陰で大海原をジョギングするのが好きになった。しかし、東京湾をジョギングしたのは大きな間違いだった。

タンカーやらコンテナ船、釣り船、屋形船、ヨット、軍艦などが所狭しと往来している。風の強い日はとくに危険だった。高い波頭で遠くが見渡せないと思っていいたら、案の定小さな屋形船が波間の陰から突然現れて、僕は呆気なく轢かれてしまった。

「い、今、人を跳ねなかったかあ」

「何、寝ぼけとるんだあ。ここは海の上だぞ。ばっかもの、しつかり目ん玉開けてろ！」

そんな会話が聞こえたかと思ったら、船は遠ざかっていってしまった。僕は死んで超能力が無くなったら、僕の体は昔のようにまた水の中へ入れるのだろうか。水面の上で仰向けに横たわりながら思った。僕はちよつと懐かしい気持ちがして嬉しくなった。水の中に入るようになったら、また、君と一緒に泳げたらいいなあ、と思った。

何時間経つたらう。目を覚ました僕は、深い海底へと吸い込まれていくのが分かった。遙か上のほうから淡い光りが射している。水の中なのに苦しさはまったくなかった。

「まだ生きている。おまけに水の中でも呼吸ができる」

僕は地上に出ようと、もがくように水を手足で掻いた。やっと水面に出ようとした途端、何かに頭を思い切りぶつけた。両手で触ると、それはとても軟らかい。しばらくして、空気の塊と分かった。

どうやら今度は水から出られない体になってしまったようだ。こんなことになって、僕は何よりも話し相手がいなくなってしまうて

悲しいんだ。本当のロンリイガイになってしまった。毎日、魚が食事を持って来たりするだけ。ときどき、魚とも話すけど、僕には何の話をしてるのか、よく理解できない。だから、こんな手紙を書いている。僕には君だけが頼りだ。

よかつたら、顔だけでも見せに来てくれないだろうか。待つてるよ。

僕の友へ

田中

*

田中君の手紙はそこで終わっていた。今、田中君はまだ病院にいるのかもしれない。いや、田中君の手紙にあるように、東京湾にいるのかもしれない。

日曜日、僕は東京湾に浮かぶ人工島「海蛸」^{つみぼたろ}に行ってみた。冬だと言うのに、暖かな日が体を包んでいた。心の底から田中君に会ってみたくなった。ここなら、田中君がいそうな気がした。田中君は目立ちたがりやだったから、有名な海蛸が好きだと思った。田中君のことなら何だって分かる。久しぶりに田中君の顔も見えたかった。

海蛸の海岸に立った。肌にあたる風が冷たく、遠くにたくさん船が浮かんで、ゆっくり動いていた。

僕は海の中を覗き込んだ。僕の顔が映っていた。しばらく見つめていると、田中君の顔が海の中からのぞいていた。僕がにっこり笑うと、田中君も笑った。

「やあ、」

僕が片手を挙げて挨拶すると、田中君も同じ動作をした。
「来てくれたんだね」

田中君が涙を流しながらそう言った気がした。僕も田中君の気持ちと思うと、涙が出てきて泣いてしまった。

「手紙見たよ」

僕はむねポケットにしまった手紙の辺りを手で押さえた。田中君

はこつくりとうなずいた。手紙の入ったジャケットを脱ぎ、履いてきた靴を片方ずつ脱いだ。靴の上にジャケットをきちんとたたんでおくと、冷たそうな凍えた水を見つめた。

「海の中は寒くないのかい？」

田中君は僕の問い掛けにただ笑っていた。昔のように暖かな笑いだった。僕は静かに海の中へつま先をつけてみる。押し寄せた波がソックスを濡らし、足首まで濡らした。水は冷たくなかった。それどころか、どこか暖かさを感じた。田中君が待っていてくれるからだろう。

「また一緒に泳げるね。中学のころ以来だよ」

僕はゆっくりゆっくり歩を進めていった。胸まで海水がつかった。ときどき押し寄せる波で海水が口の中へ入った。少し咳き込んだ。海の味はやはり塩辛かった。僕は押し寄せる水の中へ徐々に進んでいった。

「田中君、いるのかい？」

声を出した次の瞬間、大きな波が来て、僕の足はすぐわれ、水中に飲み込まれた。

「ああ、さつきからずっときみのそばにいたよ」

耳元にやつと暖かな言葉が返ってきた。たくさんの海水を飲み苦しめてしょうがなかったが、これも儀式の一つなのだ。遠のく意識を振り絞り、僕は次の儀式のために海流に身を任せた。僕の体はどんどん海の底に沈んでいった。もう、苦しくはなかった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0154d/>

悲しみのロンリガイ

2010年10月16日00時39分発行